

正師 安田理深先生

横 山 久 安

今朝も早くからサンデーがけたたましい声で、ワンワンと吠える。散歩に連れて行けという激しい催促である。

サンデーは二年半ほど前から飼っている雑種の牡犬オスだが、わが家の飼犬となるまで約一か年余り、今私どもの任んでいる京都東山連峰の第三十五峰（光明山）と第三十六峰（稲荷山）との山合い附近で、飼主のない、いわゆる野良犬として生きていた。近所の犬好きの大人や子供達が餌をやるので、町内の住民達には割合と慣れていて危害を加えることはなかったが、新聞配達人などの他所人よそびとがバイクや自転車で通りかかると、激しく吠えかかったり、噛みついて怪我をさせたりした。いつかきつと、そういう人達の誰かがサンデーをいじめたのだらうと思う。

町内としても、そういう犬はいつまでも放っておけないので、合議の結果、保健所にひきとってもらおうということになっていたが、そういう状況下でサンデーはわが家の飼犬となったのである。保健所に渡して殺してしまうには、どうにもやはり可哀相だったし、それにちょうどその頃、わが家に二度も泥棒が入ったということもあって、この際サンデーに番犬として役立ってもらおうとも考えたからである。ところがそれからが大変であった。何しろサンデーからすれば、それまでずっと野良犬として自由奔放に生きてきた身が、にわかに首輪を嵌められて、小さな小屋に住居を限定されたわけだから、まさに難行苦行を強いられたことになる。その結果、サンデーは朝夕の散歩などではと

でも満足せず、時をかまわずに外出を要求して狂気のように吠え続けたのである。そのくせ見知らぬ誰がきても一向に吠えないので、番犬の役をしてもらおうなどと考えた当初の期待は全く裏切られたわけである。しかも一たん散歩に連れて出ると、引き綱をもつ飼主の気持などはまるで無視して、ただ自分の思い通りに強い力でぐんぐんと引っ張るものだから、たまったものでない。力の弱い家内は足首を捻挫して、そこを腫らし、いまだに病院通いを続けている始末である。

それに加えて、さかりがつくと一晩中ワンワンと吠えやまないので、近所迷惑でもあるし、家の者は睡眠できない。ついにその極限状況に達して、もうやはり保健所にやるより仕方あるまいということになったが、しかし考えてみれば縁あってわが家の一員になったサンデーである。いやでもその縁は大事にせねばなるまい。何とか躰をして、ききわけのある賢い犬になってもらおうと、真剣に努力してみたけれども、思い通りにことは運んでくれない。熏習とは恐ろしいもので、一年以上も好き放題に放置されていた犬は、どう努力してもなかなか飼主の意を汲むような、素直でかわいい愛犬とはならぬのである。

相も変らず手前勝手な要求と行動しかしない愚かなサンデーが腹立たしかったし、それに、多忙な毎日、朝夕の散歩に連れ歩くだけでも、かなりの心身の負担だったので、もう思い切ってこういう空しい努力はやめようと思っていた矢先、私はふとこう思い当って愕然としたのである。へサンデーは自分自身の姿だったのだ。折角の飼主の心を心ともせぬ、分からず屋のサンデー。そういうサンデーこそ正しく私自身の姿だったのだ。

私がサンデーのことを長々と書いたのは他でもない。安田先生という得がたき師に出会い、しかも亡くなられる最後の最後まで、尽くせぬご恩をいただきながら、一向にそれに報いることもなく、それどころかそのよき師に背き、その御教えに背き、そして真の自己にも背き続けてきた私。そういう私自身の愚昧さを自分の似姿であるサンデーに託して、克明に己が心に描写しておきたかったからである。

私が安田先生に初めてお目にかかったのは晩学の大学院を終えて、種智院大学と洛南高校の専任として勤務するようになった昭和三十七年の暮の頃である。当時、洛南高校の副校長（現、校長）三浦俊良先生のご自坊である東寺塔頭の宝菩提院で、毎月、安田先生の『十地経論』のご講義が行われていたが、私もやがてその三浦先生や聞法の先輩である岩橋政寛氏（現、東寺寺務長）や今も同僚の虎頭・生姜塚両先生らに導かれて、聞法の座に連なることになったのである。

その頃、『十地経論』は第五難勝地から第六現前地に入るあたりのご講義であったが、長年西洋哲学の畑にばかりいた在家の私にとって、初めて聞く先生の、人間実存を解明されていく生きた仏法のご講義はまことに驚異であった。過日こういうことがあった。大学の友人の告別式がご縁で、大阪のさる国立大学の倫理学の教授をしている旧友と出会い、久しぶりに杯を交わした。その旧友は学生時代からのヘーゲリアンで、ヘーゲルの著作の翻訳も数点手がけてきているが、自分は五十歳を過ぎた今、何故か大学で教えていることや生きていくこと自体が空しく感じられて仕方ないので、一度是非、仏者のお話を聞くチャンスを与えてほしいという。それならということで、今、宝菩提院で行われている仲野良俊先生の『十地経論初歡喜地』のご講義にお連れしたが、講義の後、その友人は、「善とは求道心である、という言葉にはひどく感動した。自分は西洋倫理学の世界で、善悪の問題に深く関わってきているが、善の概念のそういう規定は聞き初めだったし、ほかにもなるほどと思われることが多くてびっくりした。これからも、もっとお話を聞きたい。」と語っていたが、道を求めて学ぶもののロゴス（道理・言葉）との出会いの感動はそういうものだと思う。私が安田先生のご講義を初めて聞いた時の驚きや感動もそのようであった。

先生の、深い思索から静かに、時には激しく熱情的に、然も一言もおろそかにせぬ的確なお言葉で語られていくご講義は、その内容の深さと不馴れな仏典の用語に戸惑いながらも、強烈な印象で私の魂の中にくい入っていったのである。それに、先生の西洋哲学への深い造詣と、それを駆使されての自在なご講義は、私にとって聞き慣れぬ仏法を

極めて身近なものに感じさせてくれた。私が聞法し始めてから間もなく深い感銘をもって教わった大乘の縁起觀を展開する第六現前地の〈三界虚妄但是一心作〉の仏語は、ずっと後に先生からその書をご揮毫いただき、今わが家の二階の床の間を荘嚴している。

安田先生がご病気で入院される以前、私が聞法し始めてから二、三年を経過した四十二歳の厄年の頃、私は自業自得の心身の過労が原因して大病を患い、長期間入院することとなった。病氣をおして参加した福井県大野市での先生の聞法の会から、地元京都の病院へのタクシーでの直行入院であった。入院中、私は鬚髪を伸びるにまかせて、キリスト教の聖書に読み耽っていた。人間の意識は恐ろしいもので、こういう姿で、こういう毎日を送っていると、あたかも自分が聖者になる使命をもって生まれてきたかのように錯覚するものである。退院後、私は女性問題もあって、家を離れて東寺の本坊に居住した。人には女性問題の解決に窮して寺院を隠れ蓑にしたと解されていたようだが、私自身からすればその女性も自分を聖者にするため出現された神仏の化身であると思われていたし、入院中からの意識の連続で、それがいかに困難でも、そしてまた他からどのように非難されることがあっても、自分は出家して自分本来の使命を果たす道を歩まねばならぬと大真面目に考えていたのである。今から思うと、自分は安田先生から一体何を聞いていたのかと恥ずかしく思う。

約一年ほどお寺で毎朝掃除、勤行して学校に通っていたが、わが道を達成するにはそういう生活が不徹底に思えたので、私はある事件をきっかけに、若干の躊躇はあったものの、もっと徹底して職も家も一切を投げ捨てて、遍歴放浪の旅に出ようと決心しかけていた。ちょうど紀野一義氏の著『遍歴放浪の世界』が出版された頃のことである。そういう状況下で私は最終の決断をと思って、下総のご自宅に先生を訪問したのである。その時先生は、ほとんど私が何も語らぬ前に、静かにこういう主旨のことをおっしゃられた。「仏教は聖道門もあるけれども、凡夫の自覚に徹す

る道もある。その方が無理がなくていい。」心に決めたことは実行しようと決意しながらも、どこかその決行に無理と不自然さを感じていた私は、その先生の一言で決心を翻し、なかなか家の中に入れてくれぬ家内に土下座して詫び、久し振りのわが家の敷居をまたいたのである。あの時、先生のあのお言葉がなかったら、今頃私はどこでどうなっていたことであろうか。

そんなことがあって後、先生のご入院の期間を除いて、私は先生のご講義のあるところ、『十地経論』は勿論のこと、相応学舎の『成唯識論』、夏の訓覇先生のご自坊、金蔵寺での会、飛越相応学舎の『解深密経』の会、更には毎

年先生のご自宅で行われる報恩講等と、ほとんど欠かすことなく足を運んで聴聞させていただいた。

ところがである。このように一見、熱心な聞法者であり、求道者であるかに見える恰好はしていたものの、その内実はそうではなかったのである。いざ日常生活に帰ってみると、心弱き私は、公私どもの生活の多忙と煩惱熾盛の中に埋没して、あのかつての必死の決意もどこへやら、聞法もただへ行かねば自分が気になるから」という、極めて消極的な心の一点にだけ支えられて、重たい足を運んでいたに過ぎなかったのである。

とすると、いかに自分が直情径行の思慮浅き徒輩であったとはいえ、かつて自ら求道者をもって自認し、その求道に一切を捨てようとしてまでした自分は一体何だったのか。ただおてもりの虚構の幻想を追い、ロマンチックな夢を見ていたに過ぎなかったのか。何れにしろ自分は偽者で、本当の求道者ではなかったのだ。飛騨高山での先生のご講義の終わった後、夕食会の席で、私は意を決して率直にそういう自分の真実を先生に打ち明けた。その時先生は、じっと私の眼を見据えられて、言下に「求道心のないのを立場にしたらいい。」とおっしゃられたが、何故かその時私は涙が溢れ出てとまらなかった。

道元禪師は『学道用心集』の中で「（主）縦ひ頭密の教籍（主）を伝ふることあるも、未だ名利を抛（主）たずんば、未だ発心と称せず。」と厳しく求道のあり方を説いておられるが、私の知る限りでも先生は本当に名利を捨てられ、名利に動かされない方であった。

過日、宝菩提院に於て先生の一周年の法要が行われた時、西元宗助先生の追悼ご法話の中で、「私など、まだ心のどこかにそういうものが残っているけれども、安田先生は本当に名利を超越された方でした。」とおっしゃってられたのが印象深い、そのことだけに限っても、私は先生ほどの真の求道者にお目にかかったことがない。誰からか私は先生がお若い頃、「求道して飯が食えなくなったら死んだらいい。」とおっしゃられたと聞いたことがあるが、それほど先生の求道は真剣ですさまじく、生涯、求道ということの本来あるべき姿を身をもって私達にお示し下されたのだと思う。

道元禪師はまた、「正師を得ずんば、学ばざるに如かず。」とも書いておられるが、まことにそういう先生こそ、私達にとって比類なき正師であり、真の善知識であった。たとい「法に依りて人に依らざれ」という言葉が先生のご遺言であるにしろ、あるいはまた、人生行路の中で私がどのように低迷（しん）逡巡（じゆん）しておろうとも、ただ先生というご人格を通してのみ、私は人間成就という人生における根本課題への解決の道を見定めることができるのである。

土佐の片田舎にいた私の父は熟年の頃から熱心な法華経信奉者になっていたが、その父がよく私に本当のよき師に会いたいと言っていたのを思い出す。父はついにそのよき師に巡り会うことなく死んでいったけれども、父のその宿願は子の私に引き継がれ、ついに安田先生という此の上ない善知識と出会い得たのではないかとも思われる。

ところで、さて翻って私自身の現実はどうなのか。そのようなよき師に恵まれながら、果たしてそれに応えうるよき弟子であったのか。ノーである。いや、それどころではない。昨年（し）の二月十九日の夜遅く、緊急の電話連絡で先生

のご遺体に接した時、何故か私の目から涙が出なかったのである。ショックが大き過ぎて、茫然自失していたのではない。私は自分でよく知っている。私の自己関心の我執が私の目から涙を流さなかったのである。何ということか。海山のご恩をいただきながら、それでもなお、その先生の死に会って、涙さえ流さぬ私。私はふとイエスを裏切り、その罪の呵責にたえかねて、ついには燃え盛る炎の中に身を投じて自害し果てたユダを思い浮べた。そうだ、きつとユダも自分のような人間であったに違いない。釈尊の涅槃図さながらに、先生のご遺体の前で嘆き悲しむ多くのよきお弟子達のように、なぜ自分も素直に涙を流すことができなかったのか。その思いで私はそれから数日間、眠れぬ夜が続いて心苦しかった。そうだ。私の正体はユダだったのだ。いかに愚かな畜生とはいえ、さきのサンデーなど、私の比ではない。

安田先生の死は、私がかつて自らに夢見た聖者とは対極的に、自らの罪悪深重の悪魔性の本性をいやが上にも露呈せしめ、自知せしめたのである。先生は恐らくそういう私を一切お見通しであったと思う。そしてあるいはキリストがユダに対してそうであったように、先生は私という一個の愚かな人間の宿業を、深く悲しみ痛んで下さっていたように思える。

私のためにお書き下された南無阿弥陀仏の名号の前に端座して、今しみじみとそういう先生の温かいお心が私に伝わってくるのである。

編集部から原稿のご依頼があった時、正直いって私は困り果てた。〈書かなければならない〉という思いでお引受けはしたものの、そのこと〈書けない〉こととのジレンマに陥ることが目に見えていたからである。書けなかった理由は拙文を読んでいただければお分かりいただけだと思う。書けば、まず『親鸞教学』に期待されるような、相応しい原稿にならないだろうし、正

執筆者住所が掲載されているため
リポジット非公開とする。

直に書けば自分の恥曝しにもなる。そういうことで、事実、原稿をお引受けしてからの日々は苦しかった。気になって眠れない夜もあったが、結局、無責任ながらへ書けなかった」ということでおことわりしようかとも思っていた。ところが、原稿締切りの土壇場になって、編集部の方々の温かいお言葉に励まされて思い直し、思い切って洗いざらい書くことにした。ご期待にそえる原稿にはならなかったと思うが、あえてこれを記して、これからの聞法の新たな足場にしりたいと思うのである。

(昭和五八・五・五)